

## 西洋における「話し言葉」の「書き言葉」への優越性がもたらす 社会の自己革新力

シュテファン・カイザー

筑波大学

分析的な思考は文字言語によってもたらされたといわれる。しかし、古代ギリシャでは、政治・科学などの進展は公の場での討論に負うところが大きかった。そのプロセスにおいてはレトリックを駆使しての口頭による他者の説得が文字言語より重視された。また、ユダヤ・キリスト教の伝統においても、弁証法などによる口頭の伝統が強く、文献の解釈の際にも、その方法が一般的だった。ラテン語による男子の中等教育の長い伝統においても、文献を扱いながらも口頭による議論が中心的な位置を保った。こうして、常に口頭による議論の中から新しいものが生まれ、現在でも裁判・議会政治・社会一般において対話形式の議論が盛んだ。

Self-renewal in Western society as caused by  
the superiority of the spoken over the written  
language

Stefan Kaiser

University of Tsukuba

It is said that analytic thinking emerged after the invention of writing. However, in the city states of ancient Greece the propagation of political and scientific ideas took place largely through public debate, which took preference over the written word long after books and documents were produced. Rhetoric was an important part of this oral culture, as was dialectic argumentation. Dialectics was also important in the Judaeo-Christian tradition, especially in the Rabbinic Academies. The long tradition of Latin education for boys also placed great importance on debating, a trend that still survives in various disguises today.

0 筆者に与えられた題には、二つのキーワードならぬキーフレーズがある。

0-1 西洋社会の自己革新力

0-2 西洋における「話し言葉」の「書き言葉」への優越性

そして、両者が因果関係となっている。

ところが、0-1は筆者の専門とする「ことば」から遠く離れた存在で、何となく分かっているつもりでも、正確な議論は筆者の力が及ばぬところだ。そこで、幾つかの多大なる影響力を持った、周知の出来事を（あわせて、その原動力となった要素をごく大ざっぱに）列挙するにとどめ、自己革新力は自明の現象である立場をとる。

(8C-9C) 東西教会の聖像争い (ヘレニズム対ユダヤ・キリスト教)

(1517年から) ルターらの宗教改革とカトリックの反革命

(1789年) フランス革命 (批判的精神: 自由と平等)

(1917年) ロシア革命 (マルクス思想)

## 1 西洋における「話し言葉」の「書き言葉」への優越性

### 1-1 文字以前話しことば (口頭文化)

文字の発明以前には、無論コミュニケーションは口頭によるものだった。その大半は、その場で消えてしまうものだった (時間と場所を超越できず、現在中心)。しかし、一方では、「文化」 (過去の記憶) の伝承も行われた。

記憶による口頭伝承を可能にした方法は、リズム (音楽も) ・繰り返し・対照法・頭韻・決まり文句などの利用だった。一般に不正確で・時と場合により部分的に異なるもので、また状況の変化にともなって変化する性質のものだった。

#### 1-1-1 口頭文化における「ことば」の地位

「ことば」の地位は一般に高いものだったと思われる。(おそらく) あらゆる口頭文化において、口頭による話術が尊重された (例、ホメロスの叙事詩・人麿の長歌) が、これには、上記のような、記憶を補助する要素が付き物だった。

#### 1-1-2 古代ギリシャを例として

一方、古代ギリシャ語の *logos* は「ことば」とともに、「話」・「議論」の意味がある。また、派生語としては *logike techne* (論理)、*logikos* (論理的) などがあり、ものごとの道理を説明したり、相手を説得するものとして捉えられた。

#### 1-1-3 日本を例として

日本の場合、古くから「こと・言」=「こと・事」という捉え方があったようだ。いわゆる「言霊信仰」で、ことばが差し示すもの自体を支配するという考えだった。

だから、万葉集などで、男が乙女に名前を言わせるだけで我がものになる。また、日本の神々の名前が長いのは、呼び方が間接的で、いわば実名を避けるものだったかららしい。その伝統は形を変えて、現在でも根強く残っている。例えば、「縁起もの」の多くはものの色や形だけでなく、ことばに宿る潜在的な「意味」というか、こじつけによって認識されている現象がそうである。

あるいは、メガホンによる「選挙運動」の「○○でございます。どうぞよろしくお願

申し上げます。」というのも、「言霊」の伝統ではあるまいか。

因みに、漢語では「理屈」（理窟）が「道理を多くたくわえる」あるいは「その人」を表わすが、日本語ではマイナス表現と化てしまった。

## 1-2 文字以後の口頭文化：西洋の場合

### 1-2-1 古代ギリシャの論理・科学の発展

話し方が分析的になるには、文字をまたなければならなかったといわれている（Goody and Watt 1968 など）。古代ギリシャの学問の成立過程を概観すると、この間の事情がある程度分かる（Lloyd 1979など参照）。

例を見ると、紀元前5～4世紀ごろの『聖なる病気について』、てんかん病の原因について論じられている。一部の人が山羊の使用（肉食、毛皮の衣類・靴）を禁止しているのを取り上げ、「リビア内部の人間は健康である可能性がないはずだ。なぜなら、山羊の毛皮を食し、毛皮を利用するから。事実、毛布や衣類や靴など、山羊の毛皮から作られていないものは何一つ持っていない。なぜなら、彼等は動物は山羊しか飼っていないから。」言外に含まれている部分もあるが、これは、いわゆるModus Tollens（もしAならばBだ。しかしBではない。よってAだ。）という、論駁法の初出とされる。当時、広く議論されていた、病気の神聖なる起源（あるいは、神神の存在・在り方そのもの）に対する反論の一部だ。

その後、定理や証明など、厳密な数学的論証や演繹推論、論理学、また解剖などによる実証的研究が進展していくが、文字が使用されていたにもかかわらず、公の場における討論が広く行われたことが大きな特徴だった。

### 1-2-2 レトリックの重視

アリストテレスはそのArs Rhetorica（修辞学・雄弁術）において、レトリックを次のように定義している。あらゆるトピックについて、説得の可能な手段を発見する能力であると。そして、三分野を区別している。

法的：法廷における陳述のためのもの

討議的：政治的集会における方針促進のためのもの

明示的：国家儀礼のためのもの

一方、弁証法もあらゆる問題について論じる能力だという意味では、共通しているが、一般に認められた意見から出発するとする意味では、対応関係にある。両者の違いとしては、弁証法は共同で行うもので、競争して勝つためのものではないという点にある。

古代ギリシャでは、全5世紀あたりからレトリックはプロ化し、教えられるようになった。また、本なども数多く現われた。かなり具体的な内容だった。選言的論法を使い、それぞれに反駁・証明するか、など。すべての問題には相反する論証があるとされ、演説家の訓練も、どちらの方も支持できるものとなっていた。そして、政治や法廷などにも同様の論法が行われた。それから、医学（特に、患者を獲得するための説得や患者への質

疑の進め方、また架空の患者が異義を申し立てた場合の反論の仕方など) やその他の科学においては、公開討論が科学的思想の交換・普及に大きく寄与したと考えられている。

### 1-2-3 政治体制とレトリック・弁証法

アテネを初め、古代ギリシャの都市国家では法典の作成が盛んにおこなわれた。特に、立憲政治の形態を作り上げた点が注目される。政治的集会で発言できる権利や投票などの政治的権利が与えられ、また自由市民は当然のように政治に参加する風潮があった。公職の多くは、くじ引きで決定されたが、大半は一回の任期に限られていた。また、公職や陪審員の任務には報酬が払われた。市民は自由そのもの、言論の自由、また立憲政治の形態に関する強い関心をもっていただろう。やはりここでも、公開の場での説得がたいへん重要だったわけである。

### 1-2-4 その後の西洋社会とレトリック

古代ギリシャ以降、西洋の文化は、少なくとも産業革命・ロマン主義の時代まで、レトリック文化といえる。言い替えば、古代ギリシャ以来の西洋ではレトリックが技法・芸術にまで高められた。レトリックは伝統的に五つの部分からなっている。ラテン語でいうと、*inventio* (発想), *dispositio* (配置), *elocutio* (修辭), *memoria* (記憶), *pronuntiatio* (発表) だ。

口頭文化から考えて興味深いのは、記憶・発表という部分だ。つまり、人前で話す場合、スピーチをすべて暗記した上で、効果的な発表の仕方が求められていた。しかも、文字以降でもそれが長い間変らなかつた。

### 1-2-5 ユダヤ・キリスト教の影響

西洋文化のもう一つ大きな源流はいうまでもなくユダヤ・キリスト教の伝統だ。堀米 (1970) がいうように、そこには、ギリシャやローマにはなかつた時間の感覚 (円環対線上) があつた。それは、この宗教には、歴史記憶 (*historical memory*) があつて、基本的には出来事中心の宗教 (*event religion*) だからだ (Ayers 1983)。神の意思は歴史の出来事により表明される。しかし、そういった出来事は、現在も生きているという特徴をもつ。それから、ユダヤ・キリスト教は、契約に基づく宗教だ。

我々の神、主は、ホレブで我々と契約を結ばれた。主はこの契約を我々の祖先と結ばれたのではなく、今ここに生きている我々すべてと結ばれた。

(旧約聖書、申命記 5、2-3)

ユダヤ・キリスト教では、過去の出来事が現在に意味を与えるものとして捉えられている。しかし、未来への姿勢も合わせもっており、最終的には神の天国に統合されると信じられている (ヤヌス神的両面性)。

ユダヤ・キリスト教では、対立要素が多く、弁証論的だといえる。例えば、神は人間を作った。人間に自由を与えた。なぜなら、そうしないと、自分の自由意思で共同体が形成できない。逆に、もし神が人間を神を全面的に信じ、その結果よい社会を作る、選択肢のない条件で作ったのなら、自由意思がなくなってしまう、という基本的な議論となっている。

ユダヤ教では、「書かれた法律」がモーゼの五書で記述されているが、それに対して長い間に互って行われた「口頭の法律」、つまり解釈、が「ミシュナ」として編集され、それに対してタルムッド・アカデミーなどにおける注釈が「ゲマラ」で、合わせてタルムッドの基となる。ラビ（法律博士）などの聖人による客観的な討論が多く、弁証論中心だ。

### 1-2-6 ヨーロッパの男子教育の伝統と口頭語・文章語

1500年近くに互るラテン語の勉強（これは、読める人しか話さなかった言語で、そういう意味では一方では書き言葉に絶大なる信用を置くという結果も生んだ）が、レトリックの伝統と強く結びついたものだった。中世のliberal arts（自由七科）は文法・論理学・音楽・算術・幾何学・天文学・修辞学から構成されていた。表現の仕方を学校など教える唯一の教科は演説（oration）だった（ラテン語の学習のなかで）。

Ong（1971）は、ラテン語の学習を男子の思春期儀礼と捉えるが、この勉強が論争を中心に行われた。現在でもヨーロッパの一部において、博士号取得の条件として公開の口頭諮問が論争形式で行われていることが、その延長線の上にある。つまり、相手を公然と言葉で納得させられるだけの研究上の論理性だけでなく、聴衆も納得できる言葉の使い方・組み立てもそこで求められる。

こういった口頭諮問はdefence（防御）というが、同じ名称は法廷における被告側の弁護でも使われ、よく似たアプローチがとられている。

レトリックはキリスト教など宗教の世界にも入り込んだが、ユダヤ教やキリスト教では、「なぜ神は人間に罪を犯す自由を与えたか」や「キリストは神か人間か」などなど、常に盛んな議論が行われた。

ルネサンス期以降、印刷の普及などに伴って、レトリックは次第に書き言葉に移行する。中世の教育では一般教育だったのが、19世紀の末、教育制度から姿を消す。価値判断においても、産業革命・ロマン主義の時代からは、レトリックは科学とロマン主義との対比から軽蔑されるようになった。

しかし、そういいながらも別の形に改組された面がある。例えば、学校教育では、何らかの形で小学・高校や大学一年の国語科などで具体的な話術が教えられている。また、マーケティングや広告、またcreative writingのコースでも取り上げられている。

また、McCroskey（1982）のような話し方の本でも、伝統的なレトリックとそっくりの構成要素からなっているが、アイコンタクトなどボディー・ランゲージの重要性を強調している。

また、裁判・議会政治・社会一般において対話形式の議論が現在でも盛んに行われてお

り、日本と比較するといろいろな違いが見られる。政治家の例がよく取り上げられる (leader ならぬ reader) が、西洋では政治家が相手を説得する力が相変わらず求められ、そのためにコミュニケーションのプロの力を借りるケースが珍しくない。メディアにおけるスタイルもそうであり、また上・中流階級 (例えばイギリスの "the chattering classes") の一般生活の中でも「ストーリー」やジョークによる相手の「もてなし」が大切だ。口頭発表では、具体的な例を挙げて、考察を行う。

#### 参考文献 (口頭発表関係のものを含む)

- Ayers, Robert H. 1983 *Judaism and Christianity: Origins, developments and recent trends*. Lanham etc.: University Press of America.
- Goody J, Watt I 1968 The consequences of literacy. In Goody J (ed) 1968: 27-68.
- Goody J (ed) 1968 *Literacy in traditional societies*. CUP.
- Lloyd, G.E.R. 1979 *Magic, reason and experience: Studies in the origin and development of Greek science*. Cambridge etc.: Cambridge UP.
- McCroskey, James C. 1982 *An Introduction to Rhetorical Communication*. 4th ed, Eaglewood Cliffs, N.J.: Prentice-Hall.
- Ong, Walter J. 1971 *Rhetoric, Romance and Technology: Studies in the interaction of expression and culture*. Ithaca and London: Cornell UP.
- Ong WJ 1982 *Orality and literacy: the technologizing of the word*. Methuen.
- Storry, Richard 1979 The English-language presentation of Japan's case during the China Emergency of the late nineteen-thirties. In I. Nish & Ch. Dunn, *European Studies on Japan*. Tenterden, Kent: Paul Norbury Publications.
- 中村元 (1970) 「日本人の思惟方法」増田四郎編 (1970) 『西洋と日本-比較文明的考察』中公新書所収
- 芳賀綏 (1985) 『言論100年 日本人はこう話した』三省堂撰書123
- (1979) 『日本人の表現心理』中公叢書
- 堀米庸造 (1970) 「ヨーロッパとは何か」増田四郎編 (1970) 『西洋と日本-比較文明的考察』中公新書所収